

2013年の主要水産物の需要と供給

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数 量							価 格							
	生 産	産地	食用 加工	輸 入	輸 出	東 京	缶 びん詰	在 庫	生産額 (億円)	産地	輸入 (億円)	輸出 (億円)	東 京	魚介類消費 支出1世帯	為替 レート
24	4,864	1,675	538	2,697	440	524	116	932	14,178	160	14,909	1,700	848	77,803	79.55
25		1,654		2,473	552	514		862		173	15,669	2,216	872	78,739	97.65
%	0	99	0	92	125	98	0	93		108	105	130	103	101	122.75

数 量

本年の国内生産量は、産地データからみると前年とほぼ同水準であったものと推定される。

全体的な特徴としては日本海のまき網により漁獲が増えたクロマグロ、資源が上向きのマイワシ、ウルメ、カタクチ等のイワシ類、北海道沿岸まで生息域を伸ばしているブリ類などの生産が伸びている

大きく増加した魚種は、上記クロマグロ、マイワシ、ウルメイワシ、カタクチイワシ、マダラ、スルメイカ、秋サケ類、ブリ類、マダラとうであった。一方大きく減少した魚種は、メバチ、キハダ、サバ類、サンマ、ホッケ、冷スルメイカ等であった。

輸入は、為替円安もあって前年を下回り、247万トンと前年をやや下回った。

本年は、目立って多くなったのは昨年に続いてタラ、サバ、国内漁が不振であったビンナガや赤魚、そしてイカ、タコ類であり、目立って減少したのは昨年に続いてカツオやキハダ、メバチ、養殖物の生産減がみられたサケマス類、シシャモ、エビ・カニ類等で、他は横ばい圏の魚類が多かった。

近年増加基調が続いていた輸出は、本年は55万トンで為替円安に反転したこと原発事故による各国の輸入規制も徐々に緩和されたこともあり前年（44万トン）をかなり上回った。

国内生産が久しぶりに好調だったサケ類、ヒラメ・カレイ類、マグロ類全体、カツオ、タラ、サンマ、イワシ、ホタテ貝等総じて数量を伸ばした魚類が多く、目立って減少したものはイカ類位であった。

東京の入荷量は、51.4万トンでほぼ前年(52.4万トン)並みで、その傾向は生産量にほぼ対応していた。

月平均在庫量は、86万トンで前年（93万トン）を下回った。輸入量の減少と輸出の回復が反映されたものである。

価 格 ・ 金 額

本年の産地価格の特徴は、燃油の高騰、円安による輸入魚の高値等の影響もあって生産量が横ばいであったが、総じて堅調な1年であった。

東京消費地価格は、872円で国内物、輸入物の高値を反映し引続き前年（848円）をやや上回った。

輸入金額は、1兆5669億円（前年：1兆4909億円）で前年を760億円上回った。

輸出金額は、2216億円で引続き前年（1700億円）を516億円上回った。

円 レ ー ト

25年の円レート（対USドル）は、年平均97円で前年（80円）並みであった。

円レートは、1985年の9月のプラザ合意以降一時的な円安がみられたものの急速な円高・ドル安傾向が10年間続いた。

しかし、1995年秋から円安に転じ、1997年以降に証券会社、銀行の倒産が続き金融システム不安等も重なり一層円安が進行し、1998年も一時140円台の安値を記録するなど秋口まで円安が進行した。その後、一時年末にかけて円高（113円）へと反騰したが、1999年は夏場までやや円安（114～121円）で推移したが、下半期には急激に円高に反騰し、12月は103円まで急騰した。2000年は年末の円高の103円からスタートで、一時的な円高はあったが、基本的には円安傾向で推移し、年末には111円まで下げた。2001年は長引く不況や銀行、ゼネコン、流通分野での倒産、再編もあり、年を跨いで急激な円安が進行し、9、10月に119円とやや円高に戻したものの、12月には124円と円安に急落した。2002年には131円の円安から始まってその後円高に転じ、8月に118円まで上昇したが、一向に景況感の低迷もあり12月には122円まで下げた。その結果、為替は10年前の水準まで戻した。2003年は年初の119円から始まり9月までは2円前後の幅での小さな動きであったが、10月に111円と急騰し、11、12月と小幅円高で推移し108円まで上げた。2004年は年初106円の円高で始まり、5月に112円の円安に振れたが、その後は円高に転じ11月以降は104円、103円まで上げた。2005年は年初の103円から下半期には円安に変わり7月には110円まで下げ、その後一貫して円安で推移し、12月には119円まで下げ、年末には若干円高となり117円台で推移した。2006年、年初は引続き円高の116円でその後も117円とやや円安で推移していたが、5月に112円と円高に振れたが、それ以降は11月の119円までじり安推移し、11、12月と若干の円高に戻した。2007年は年末以上に円安の121円に始まり、6月には123円まで円安が進行した。しかし米国のサブプライムローン等の影響もあって、7月以降は円高に振れ、11月には110円まで進み、12月には112円にやや円安となったが、基本的には下半期は円高基調になった。

2008年は、年初から円高となり、3月100円まで円高が進んだその後は8月まで円安に振れたが、9月のリーマンショック以降の世界金融危機の拡がりの中で円は急騰し、12月には91円まで上げた。2009年は90円の円高から始まり、4月には99円の円安となり、その後は円高となり、11月には90円を割り、12月には一時84円台を記録するなど、円高が進行した。

2010年は当初は91円の円安で始まり、6月まで90-93円の幅で進行したが、下半期に入って87円と90円を割り、その後も円高は10月の82円まで進み、12月の83円とその後若干戻したものの、円高が際立った。2011年は年初83円から始まり6月には81円台まで上昇した。下半期に入るとギリシャの金融危機からEU全体の金融不安が広がり、相対的に信用がある円が買われ、9、10月は77円台まで円高が一層進んだ。その後78円まで戻したが、下半期の円高は際立っていた。2012年は、年末からの円高が一層進み、76円台まで進んだ。その後はギリシャの民間債務減免もあって、一時的な危機回避策でユーロも値を戻し、円安に振れ3月には82円台まで進行した。その後ギリシャの政治的不安定性もあって再度円高に振れる動きが顕著になり9月の78円台後半まで進んだ。しかしその後は、日本国内で総選挙を巡る攻防の中で自民党有利とのメディアの発信の中で12月総選挙の圧勝もあり自民党が政権奪取に成功した。選挙期間中のその経済政策の中で為替問題にも言及したこともあり、10月以降円安に振れ12

月には83円台まで円安が進んだ。2013年は年初から円安が進み89円の円安から始まり、2月93円、3月95円、4月98円、5月101円と円安が進んだが、一時6月、8月に97円、98円と円高に振れたが、その後7月100円、9月99円、10月98円、11月100円、12月103円となり安部新政権と日銀の金融緩和政策の中で円安が進んだ。

(参考：1984年237円→1985年240円→1986年170円→1987年146円→1988年128円→1989年137円→1990年145円→1991年135円→1992年127円→1993年112円→1994年102円→1995年94円→1996年108円→1997年121円→1998年131円→1999年114円→2000年107円→2001年121円→2002年126円→2003年116円→2004年108円→2005年110円→2006年116円→2007年118円→2008年103円→2009年94円→2010年88円→2011年81円→2012年80円→2013年98円)

石油価格(1kl当たり)

25年のA重油価格は、年初は年末より一段上げ75,000円の高値で始まり、中旬には77,000円、2月上旬79,000円、中旬85,000円、下旬86,000円とジリ高で推移し、3月下旬85,000円、4月下旬84,000円が5月中旬まで続いた。しかし5月下旬には85,000円に上昇、6月末まで続いた。その後7月上旬87,000円、中旬89,000円と再上昇し、8月中旬88,000円、下旬89,000円、9月下旬90,000円、10月中旬91,000円、11月下旬90,000円とやや下げ年末まで続いた。

参考：近年の最高値74,000円/k1(1982年11月) 75,000円/k1(2007年12月)、115,000円(2008年7月)、91,000円(2013年10月)